

「森銑三刈谷の会」だより 53(2026/6/20)

発行 2026/6/20 (月刊・メールでの投稿歓迎)
例会 第3土曜日 14:00-16:00 市中央図書館 参加自由

バックナンバー 刈谷市中央図書館>森銑三刈谷の会
共同代表 神谷磨利子・鈴木 哲 tetsu_s@katch.ne.jp

表：発表で紹介する(予定であった)貨幣の使用範囲とそれを描く代表的な作品

David Dykes

① (幕府下・維新について、明治以後の道のり?)	② (国家内と国家間の対立と上がり下がり?)
(日本の国境外、また通常時以外の影響は、必要に応じて別に考える)	(日本を対象にしても、国境外との関係や通常以外の時)
i 坪内逍遙 (1900、『国語読本』第8巻「十銭銀貨の来歴談」)	iv Joseph Addison (1710, “The Adventures of a Shilling”)
ii 坪内逍遙 (1890、「壹円紙幣の履歴ばなし」)	v Hans Christian Andersen (1865, “Sølvskillingen”, 英語 “The Silver Shilling”)
iii 小川未明 (1933、「一銭銅貨」— 個人、家庭から見て)	vi 太宰治 (1946、「貨幣」— 個人、家庭から見て)

53:2026/5/16(土) 森銑三 (1934 年)「黄表紙作家としての唐来三和」～『再会親子銭独楽』(寛政 5 年、出版つたや)を読もう No.5〈関連〉坪内逍遙「十銭銀貨の来歴談」(1900)他/Joseph Addison “The Adventures of a Shilling”(1710)他 (参加 12 人)

『再会親子銭独楽』と同様な“スピン”を示す東西の作品 David Dykes

異国文化や貿易への関心がだんだん増えていた江戸後期に、なぜか「モノ」を主人公、語り手にあげる流行りも次第に多くなった。会としても、森銑三の「黄表紙作家としての唐来三和」(1934)からヒントを受け、唐来三和の『再会親子銭独楽』の原文(1793)、それから森三郎(弟)が『赤い鳥』1934年8月号に載せた子供向けの再話『めぐりあい』も読んだ。今回は、そのテーマの括りとして、明治以後の同様の後継品いくつかと共に、類似性を示す“欧来”の例も比べる。中国関連の岩石卵生まれの旅猿スェンウーコン(こと『孫悟空』)を選んでもよかったかもしれないが、古さで東洋に負けない『黄金のロバ』またそのモダンな子孫、木彫人形からロバに、最終的に人間に上がった『ピノキーオ』のような話が西洋にもある。また、商業と硬貨に拘って、「再会親子銭」と同じく 18 世紀に遡る“The Adventures of a Shilling” Joseph Addison (イギリス、1710)と 19 世紀後半の“Sølvskillingen”(『銀貨シリング』、Hans Christian Andersen、(デンマーク、1865)こそが “It-Character”や “It-Narrator”作家の例にふさわしいのではないかと思いついた。

遠方から取った銀をアジアへ運ぶ西洋の商人と異なって、日本の商い販売者や出稼ぎ労働者の「ゼニ」交換の範囲は、黄表紙も示すように、遠くとも佐渡島ぐらいに終わる。一方、明治以後にそうは限らない。日本で何回

か経済起こしに力を入れた作家のなかに名古屋育ち、東大で政治を学び、卒業後にシェークスピアの『ベニスの商人』も初めて(1884)日本語に訳した坪内逍遙がいる。上の表の①で、彼の学校用の読本や新聞小説を参考に、市場の拡大への金銭の廻りの貢献を改めて考えた。括りには小川未明の『一銭銅貨』(1933)を選んだ。或る家庭の母子が同じような読本に向かって、明治初期を経験した祖父の話を思い出して、当時の貧困と今の一定の生活の豊かさの違いをしんみりと考える親子。この話は鈴木哲さんから勧めていただいた。

表の②には国内対立と戦争の乱れの体験があれば、国の評判が低下して周りのどのライバルにも見下ろされたくやささを知る、倫理と治安がともに地に落ち、そのときの心持 — 19 世紀に入って傷だらけの硬貨やぼろぼろの紙幣主人公からこのような身の上話を聞かされることが多い。四方からくる侮辱を逃げられないのはアンデルセンらしい。日本の読者にとって最も痛々しいのは太宰治の終戦直前の混乱を描く『貨幣』(1946)だろう。アディソンの話にも、汚された銀貨の「性転換」という意外の結末になるが、よく考えると意味合いが分かる。ダメな国王から望みも感じなかったほどよい女王の到来だ。お世辞かどうかはともかく、太宰治の短編にも完全な失格の状態で、乳も出ない駄目な母と新生児に対して役に立たない一人の軍人の謝罪。これも一種の「性転換」。

太宰治：「然して、貨幣を女性名詞とす」

最後に、発表の予定は上の通りであったが、健康上の理由で当日に入院になり、代行に神谷磨利子さんと鈴木哲さんの積極的な指導で、準備ゼロでも、計画通りに展開したそう。一つ坂下の病院で、テレパシー連絡で聞いていた。ありがとう。

三つ松さんも 1970 年当時の 英国のかねの改革前のコインを見せてくれたそうです。これにも感謝いたします。

紹介した作品を中央図書館から借りて自分らしく読んでみよう。Joseph Addison だけ、英語ではネット上で困難なくアクセスできる。和訳ではなかなか見あたらない。
https://essays.quotidiana.org/addison/adventures_of_a_shilling/

“The Adventures of a Shilling”と“The Silver Shilling”

鈴木 哲

Joseph Addison (1710) "The Adventures of a Shilling" と Hans Andersen (1862) "The Silver Shilling" を読んだ。貨幣タイトルのスピンオフである。"The Adventures of a Shilling" では the twelpenny piece が the shilling, a twelpenny ordinary, eight and forty farthings と言い換えられ、1 shilling = 12 pence = 48 farthings と分かる (pence は penny の複数形)。A pound, or a sixpence で価値は 20 倍と半減する。(Sixpence は Somerset Maugham (1919) "The Moon and Sixpence" 同様 1 語)。「反応派の兵士」とあるのは「反王派の兵士」(soldiers against the king) である。

高橋[訳] (1986) 「銀貨」 ("The Silver Shilling") の「(シリング貨が) 指の間にはさまるまで、旅行者はそれに気づかずにはいました」 (He one day found it [the shilling] between his fingers.) は「見つけ、指ではさんだ」が分かりやすいと思う。(いかん、いかん、元英語教師の癖が出ました)

『再会親子銭独楽』シリーズを顧みて

三ツ松 悟

唐来三和の黄表紙「再会親子銭独楽」は回を重ねるごとに興味が増す思いで読み終えた。15 年ほど前に一度読む機会があったが、その時は文字が追えず絵だけ見て手放していたので今回完読できたのは大きな収穫であった。

分かりやすく準備していただいた手引きのお陰で江戸時代の庶民文芸に接することが出来たことと、森銑三が唐来三和を高く評価した所以も理解できたと思っている。

原話は中国由来の説話であるが、人間社会の世相・世情・生業や喜怒哀楽を貨幣・紙幣を主人公に仕立てて描き出した古今の文芸作品が日本のみならず世界各地で創作され愛読されていることも改めて知り "The Adventures of a Shilling" をはじめいずれの作品も興味深く読ませていただいた。

"金は天下の廻りもの" とは正に名言であるが、社会の基盤に形作られ張り巡らされた貨幣経済の仕組みが、巡り廻る貨幣の口から語られるのが面白い。

好シリーズの勉強会であったと思い返す中で、個人的に感ずることが 2 点出てきた。

一つ目は貨幣のコレクションである。

私の貨幣コレクションの一つに外国貨幣がある。これ

は 1970 年 (昭和 45 年) にヨーロッパ旅行をした時に遣い残しを持ち帰った 12 カ国の補助貨幣が中心であるが、コインホルダーに納めたまま仕舞い込んでいる。5 年に一度ぐらいは思い出して眺めているが、貨幣たちは 50 年以上本来の働きを止められて悔しがっていたのではなかろうかといらぬ心配をした。

今一つはキャッシュレス決済である。

私はペイペイやスマホ決済やカード決済が使える昔人間で、未だに買い物は現金決済である。然し小学生でもスマホを楽々と使う世の中の趨勢を見ると、いずれ現金決済はこの世から姿を消すのではないかと思っている。

有史以来営々と使われてきた貨幣型代価支払い方式が消え行く時に『再会親子銭独楽』がどのように生き残るのであろうかとふと考えた。以上つまらぬ夢物語である。

国や時代によって変わる銭の話

神谷 明子

文学の研究の入りかたとしての銭の旅というか、銭を人に見立てて、動いて行く様はお国が変わればずいぶん違うと気づきました。また、書かれた時代や、対象によっても変わるということも改めてわかりました。お金は動いてこそ、生きる。経済が活発化する。一枚の銭が見た場面が多くなる話がいいと思いました。Dykes さん、いろんな作者の話のありがとうございました!!

三ツ松さんの豊富な経験や知識のお話も、小垣江しか知らない私には、味津々でした。ありがとうございました!!

期待していた「1 シリングの冒険話」

河橋 育実

「再会親子銭独楽」の関連としてお金 (紙幣・コイン) が主役の作品を Dykes さんが紹介してくださいました。

森三郎さんの作品を読む会で「めぐりあひ」を読んだ時に Dykes さんが「1 シリングの冒険話」を話題にされていたのでどんなお話かなと楽しみにしていました。

日本人作家のお話は理解できましたが、外国人作家のお話はその国の風習や通貨に疎いので難しく感じてしまいました。しかし当日、三ツ松さんが実際のコインを見せてくださり、お金の解説をしてくださったので 話の内容が理解しやすかったと思います。

貨幣に関わる日本と外国のたくさんのお話を紹介してくださった Dykes さん、ありがとうございました。

ダイクスさん提供の資料を読んで

岡部 美由紀

ダイクスさんが集めてくださった、「再来親子銭独楽」に似たところのあるいくつかの文学作品を皆で読んだ。

人生は旅だというのが、お金の流通の旅にたとえて、人生行路を重ね合わせているのが面白い。

アジソンの「1 シリングの冒険」は、政争に番弄された人間の運命を書いているのだろうか。生身の人間の実体

験だと生々しいが、主人公を硬貨にしたことで、気持ちの
みが伝わってきて読み易い。

アンデルセンの「銀貨」は、プライドを傷つけられ悲痛
な運命を辿ったシリング貨が、最後に真価を認められると
いう設定で、「みにくいアヒルの子」のテーマに共通する
ものがあると思った。

太宰の「貨幣」は、人の心情を百円紙幣の口を通して語
っているが、悲惨な体験を縷々述べた後、「赤ちゃんの背
中」に行き着いて幸福を感じたというところに、救いと
希望がある。

ご本人が欠席で直接お伝えできなかったが、良い資料
を読ませてもらい感謝する。

表 (Dykes さん作成) の①に関連して

逍遙の参考にした「上清童子の仙骨」「シリングの洒落」

神谷 磨利子

森銑三は「黄表紙作家としての唐来三和」(1934)の中
で「坪内逍遙に『壺圓紙幣物語』といふやうなものがあ
ったと思ふ」と書いている。正しくは「壺圓紙幣の履歴
ばなし」が1890年(明治23年)2・3月、「読売新聞」に連載
された。Dykes さんの資料の連載第四回目は、ある学校
の教師柿橋の財布に入った壺圓紙幣が、柿橋と高利貸と
が語る様々な社会批評や、高利貸し家族の子どもから大
人まで万事金の世の中という会話を耳にしている場面で
ある。逍遙はこの連載第一回冒頭で壺圓紙幣に、自分は
「上清童子の仙骨」も「シリングの洒落」も無い、と言
わせている。「上清童子」は『再会親子銭独楽』1丁表に
あった古銭の化身であり、「シリング」はDykes さん提示
資料のAddison "The Adventures of a Shilling"を指す。逍遙
がこの二作を意識していることが分かる。

逍遙が貨幣を素材に著した「十銭銀貨の来歴談」(『国
語読本』第8巻、1900年、富山房)も読み合わせた。生野
鉦山のあらがねが明治26年(1893)大阪造幣局で十銭銀貨
になり、人の手から手へ渡って日本中を渡り歩き、見聞
きしたことを十銭銀貨自身に語らせている。貨幣の流通
の様子が高等小学校児童にも分かる構成になっている。

予定

54: 2026/6/20(土): 鈴木哲「森銑三「今一人の江戸川乱歩」
辻村義介はいなかった」

55: 2026/7/18(土): 2階展示コーナー: 村瀬典章さん解説
「村上文庫展 三河国を探る」(8月は休会)

56: 2026/9/19(土): 三ツ松悟「小学唱歌を愛した森銑三」

57: 2026/10/17(土): 2階展示コーナー: 村瀬典章さん解
「村上文庫展」

58: 2026/11/21(土): 神谷磨利子「森銑三と妻文子〜

『ゆづり葉 森文子遺稿』(1940)を通して」(12月は休会)

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆